僕(変態) と君たち(変態) の相談部

めりめり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕（変態）　と君たち（変態）　の相談部

【Ｎコード】
Ｎ８６８３Ｙ

【作者名】
めりめり

【あらすじ】
僕が主人公の、ウハウハハーレムもの！！

…
…
…
すみません調子乗りました。
本当は、僕（変態）と他の君達（変態）が織り成す、相談青春ラブコメディ。え？ラブはない？気にするな
とりあえず、皆、変態です☆

―エピローグ―（前書き）

変態です
シモネタもちょいあります。
間違っても爽やかイケメンは出ません

―エピローグ―

「横島君って、変態だよねぇ？ちょっとそこを見込んで相談があるんだけど」
高校二年生になって一日目の僕―横島宗（よこしまはじめ）は人生で、１５７回目の『変態』を言われた。

『変態』
僕はこの言葉のくくりに入れられる人間らしい。
あ、ちなみに僕が言っている『変態』は、幼虫が蛹へ移行するあれじゃなくて、特殊性癖的な人間を指す『変態』の方だ。ここ重要。
と、まぁ、話を戻して、僕が変態だという話だ。
あと、これ、言ってて何となく微妙に落ち込むが、まぁ今は置いておこう。
――さて、まず僕が変態であるという理由だが、、、。
まぁ、自分を客観的に見て、１５７回変態と言われてれば意識せざるを得ないだろう。
理由はそれだけ。
いや、もう少し理由があったりするけど、今は関係ない。
僕が言いたいのはそこではない。
僕が言いたいのは、その変態という部分が、なぜか知らんが役に立ったということだ。
具体的に言うと、同クラスの美少女から話しかけられるなんて主人公的イベントが、僕の変態性によって引き起こされた事についてだ。
「横島君にちょっと来て欲しいところがあるんだぁ」
記念すべき１５７回目の変態発言をした美少女は、いきなりそんなことを言って、勝手に歩き始める。というか、この少女は出会って二言目に付いてこいなどと言って、付いてくる人間がいると思って

いるのだろうか？
ーーーー勿論僕は黙って付いていくけど。そもそも美少女の後ろを本人公認でついていけるなんてイベント、僕が見逃すわけないじゃないか。
それに、彼女の制服の着こなし方。これを見て、彼女を黙って見送れる人間など存在するだろうか。
膝上まである黒いニーハイソックス。更にその数センチ上で揺れるスカート。その間に見える白い太腿。生肉！
上は明るい茶色のセーター。それを、彼女はサイズを合わせずに着ている。つまり、ダボダボ。これは！これは！
……お分かりいただけただろうか。
彼女の制服の着方が、一部の人に熱狂的支持をえる着方だということに。
その一部には勿論僕も含まれる。
「く…絶対領域。。。最高すぎる…ッ！」
僕はグっと拳を固める。だって、絶対領域だぞ！？興奮せずして何が男か！
しかし、こういうことを語ると
『えー、たった数センチの、しかも太腿に興奮してるわけ？』
などと言ってくる奴が往々にいるが、あいつらは盛大に勘違いしている。
まず一つとして、胸［おっぱい］や【倫理問題的に自主規制させてもらいます】が見えることがエロい訳じゃない。
胸［おっぱい］。この響きは確かにいい。いや、最高だ。
【倫理問題的に（略）】も確かに、良いときもある。
だが、例えば、美術館などに飾ってある裸婦画を見て興奮する人間などいるだろうか。
美術館で「えっろ！これ、えろ！ちょ、ここ、１８禁だろ！」とか言ってる人間がいたら、通報するだろう？
美術館で「ふむ……これは、エロイですね。この扇情的な形が、ま

た」とか言ってる人間がいたら通報するだろう？
では、なぜ裸に我々は興奮しないのか。
――答えは簡単。隠されていないからだ。
どんな部位も隠されず、おおっぴろげに堂々と見せつけられることによって、僕たちはエロさを感じないのだ。その凛とした態度に、美しいと感じるのだ。
そもそも、【倫理問題的（略）】と口など、あまり変わらないのに、僕たちは口に何も感じない。いや、感じる人もいるけど（僕）、一旦置いておく。
まぁつまり、僕たちは、全部が見えるより、体の一部分が露出されているほうが興奮するのだ。
しかしここで勘違いされたくないのが、今僕が述べた理由が、うなじ等の部位をエロく感じるのとは違うということだ。これについては、また違う機会にでも説明しよう。
「さ、着いたよ」
と、僕が熱弁していたら、ピタッと、目の前の生肉――ゲフンゲフン。絶対領域（さっき語った生肉の部分）が――ゲフンゲフン。目の前を歩いていた彼女の足が止まった。ここは…廊下の内装的に、校舎の旧館だろう。ふむ、結構歩いたみたいだ。
とりあえず僕は一旦（ここ重要）彼女の脚から目を外して、彼女が案内してくれた場所が旧館のどこか確認する。
そして僕の目の前には、旧将棋部の部室で、
「相談…部？」
『相談部』という新しいプレートが掛けられた、古びた部屋があった。

「失礼するっすー。部長、例の横島君を連れてきましたぁ」
僕の前を先行していた、絶対少女（名前が分からないので、便宜的にこの名前で呼ぶ）は、けだるそうな声で、目の前のドアに向かっ

て話しかける。
余談だが、ドアというものも良いものだと思う。
ドア。それはつまり、自らのプライベートを晒す穴。ドアのなかには入れるかどうかで、相手が自分をどう思っているのかが分かる、便利な器具だ。
ちなみに僕は、身内以外の家に上がれた事は一度もない。
具体的な例を上げると、同級生が家に入れてくれなかった時に、「あれか、焦らしプレイかな」とか思って、ドアの前に二時間ほど立っていたら、その同級生の父が僕に千円を渡して「帰ってくれ」と懇願されたことがあったかな。
それ以来、誰かの家に行くということをやめた。
代わりにのぞき始めた。
閑話休題。
「あの、君。僕はなんでここに連れて来られたのかな？」
僕は、本当なら最初に聞くべきだったことを聞く。なんで聞いてなかったんだろう。あぁ、絶対領域のせいか。
彼女は、僕の問いを聞いて、
「ちょっと、この相談部に入部してもらいたくてね」
と答えた。
――あぁ、入部ね。なにげに僕スペック高いもんね。。。。
って、入部！？
「入部だって！？そんな！？」
そんな重要なことを、この子は黙っていたのか！
それに、部活はキツイ！そうすると僕の、日課が！
「んー？横島君って帰宅部っしょ？」
そんな僕の内心も知らずに、彼女は聞いてくる。
首を横にかしげる仕草とか、本当可愛いなぁ！！
――だけど、
「いや、そうだけど…。でも、放課後は暇じゃないと、僕は…」
「？」

彼女は疑問符を浮かべる。実際には見えないけど浮いてる。
「陸上部の練習が、、、見れないじゃないか！！！！」
陽の光と、男子生徒の視線を集めてやまない、あの濃紺のスパッツが……見れなくなってしまう！！
トラックを走り終わったときに頬を伝う、健康的な汗が！
走る前の、女子同士の柔軟が！
走ってる真っ最中の苦悶の表情も！
休憩時に、大ぴろげに広げられる、脚も！
部活などに勤しんでいたら、見れないじゃないか……ッ！！
僕の、唯一の、青春がッ！！
「…悪いけど、僕には…入部することは――」
ガチャッ。
僕が、絶対少女に入部できない旨を伝えようとした、その瞬間。
いきなり、相談部の（プレートが掛かっていたし、多分部室だろう）ドアが開いた。
そして、中から、
「ん。連れてきたか、三富士君」

ドアから出てきた彼女をあらわせる言葉は、『美しい』しか無かった。
ただ美しい。どうしようもなく、美しい。
凛とした顔つき。雪のように白い肌。全てを呑み込む漆黒の髪。小さい口から出た、透き通っているが芯のある声。ｅｔｃ…
全てが『美しい』だった。
しかし、それゆえか。
彼女はどこか虚しかった。
「ぁ……」
僕は声にならない声を上げて、彼女を見つめ続ける。

―いや、正確には、「目を離すことが出来なかった」
体が、僕の意識を無視して、彼女から目を話すことを赦さなかったのだ。
そして、そんな不可解な現象を前に言葉も出ない僕に向かって、彼女は言った。
「相談部へ、ようこそ」

にゅうぶ！（平仮名の方が可愛いだろう？）（前書き）

相談部。それは僕のハーレム！！

……じゃなくて、変態の巣窟

にゅうぶ！（平仮名の方が可愛いだろう？）

「私は、丘雫《おかしずく》。役職は相談部部長。趣味は支配だ！」
『彼女』は自信に満ち溢れた顔で、高らかに言い切った。

相談部の中から出てきた『彼女』に、無理やり中に入れられ、僕はイっちゃいますぅぅぅぅう！！
――じゃなくて、僕は困っていた。
なにせいきなり高らかに自己紹介をされたのだ。誰でも困るだろう。
「あ、私は、三富士文《みふじふみ》っす。趣味は百合っす」
そしてその後、絶対少女も自己紹介したが、なんというか印象に残りにくかった。
『彼女』のいきなりの自己紹介のせいで、僕は少し混乱してしまったからだ。
僕はあそこまで堂々と自己紹介できた奴を一度も見たことなかった。
そして多分これからもないだろう。
そう思わせるほどに、『彼女』は堂々としていた。
まるで、自分に恥じるべきところなど、どこにもないといった感じで。
それが、『彼女』の美しさを更に加速させていた。
「横島氏、君の変態さを見込んで、お願いがある」
『彼女』は僕の混乱などお構いなしに話を進める。
僕の事情など知ったことではない、というように。
―否。僕の事情などどうでもいいのか。
『彼女』にとっては、自分が全てなのだ。
趣味が支配なんて馬鹿げた物も、それ故にだろう。

だから今、僕を支配しようと侵略中なのだ。
「…入部ですか？」
僕は混乱する頭を必死で抑えつけ、どうにか聞く。
「ん。そうだ。話が早いな」
彼女は満足げにうんうん、と頷く。その姿さえ様になるのだから、
『彼女』は本当に人の上に立つような人間なのだろう。
しかし、この圧倒的自信はどこから来るのだろう。
「さて、じゃあ、この紙に名前を―」
彼女は自らのバッグから一枚の紙と、ペンを取り出し、渡してきた。
僕は返事してないんだけど……。
「あの、、、僕、、、陸上部の練習を…」
「ん？」
「いや、陸上部が…」
「ん？」
「スパッツだよ！！！！スパッツが見たいんだよ！！」
「ん？」
……圧殺された。。。イジメレベルだっただろ今の。
なんか、女王様って感じだなぁ。
ハァハァ。
「そんなに、スパッツが見たいのかい？」
僕が女王様という単語に悶えていると、『彼女』が口を開いた。
「みたいですよ！！男の夢ですよ！いや、本当ならブルマがいいけど！」
ぐっと拳を固めて、僕は叫ぶ。
スパッツが見たくない男なんて、そんなの男じゃない！
スパッツこそ、身近にある男の夢だ、と。
そう僕が熱弁すると、『彼女』は「ふむ」と声を漏らし、
ススススっと、
僕の目の前で、

スカートをたくし上げていた。

「うおおおおおおおおおおお！！！！！！」
僕は思わず雄叫びをあげていた。
だって、スカートの中には、
「ブルマ…ッ！！」
ブルマが履いてあったのだ。
――た…たくし上げブルマ！！僕は今、新たな境地を開いてしまった！！
肉の食い込み、全てを飲み込む濃紺！そして普段は見えない内腿！！！！！！！！

こんなことがあっていいのだろうか！？
「ど…どうだい？私のお願い、聞いてくれるかな？」
ここで聞こえる『彼女』の声。
ひ…卑怯な！！こんな事されたら、、、！！
聞かない訳にはいかないじゃないか。
「入…部させてください」
こうして僕は相談部に入った。
そこが変態の巣窟とは、知らずに……。

にゅうぶ！（平仮名の方が可愛いだろう？）（後書き）

次回、メンバー紹介

日曜日ッ！―１―（前書き）

僕の日曜日を公開しちゃうよ！

みんな、僕を見てっ。はぁはぁ

日曜日ッ！―１―

下腹部に尋常ではない重さを感じて、僕は目を覚ました。
「…あ？」
僕は寝惚け眼のまま、重さの正体を探る。
『あぁ、この上に美少女が乗っているのかな？』
そんな期待を抱きながら。
「わ…私、召喚されはしぇっ、馳せ参じました、あなたの使い魔です。なんなりとっ、ご、ご命令を…っ！！」とか
「あら、もう起きちゃったの？ふふ、仕方ない子ね。これから【倫理的問題によりカットさせていただきます】」とか
そんな展開になると、期待を抱いたよ。
――現実は、十キロのダンベルだったけどね。
なにこれ、おかしくない？なにゆえ僕はダンベルに起こされてるの？なんで妹とか幼馴染に起こされてないの？
「あ、起きちゃった？」
僕がどうしようもない現実に打ちのめされていると、ベッドの横から、女の子の声が聞こえてきた。
うっひょーーい。僕の朝の目覚めは、女の子と一緒だーーい。
とりあえず、声の主の女の子に挨拶をしなきゃね。
「おはよう、悠。今日も可愛いね」
「な…何言ってんの！？…恥兄のバカ」
「ん？なんかラブコメっぽい雰囲気だったのに、ただの一言でぶち壊された気がする」
「え？だって恥兄は端兄でしょ？」
「どっちも『はじにい』って呼ばれてるのに、貶されてる気がする…」
「あはははは」
…おっと、つい愛しい愛しい悠との会話に夢中になってしまった。

ちゃんと紹介しないとね。
黒髪ショートの、活発そうな女の子。高一だというのに全く育たない幼児体型は、常常僕の心を奪う。
さて、そんな少女がなぜ僕の朝に立ち会っているのかというと、それはもう聞いたら発狂しそうなくらい羨ましい理由である。
…まぁ、つまり、彼女は僕の家に住みこんでいるのだ。
僕の従姉妹として。
うふふふふふ。どうだい？羨ましくて発狂しただろう？
「はじ兄、、、なんで一人で笑ってるの？」
「いや、悠みたいな可愛い子が、同居してると思うと、なんだか優越感が沸き起こってね」
「……ばーか」
がちゃっ、と僕の部屋のドアを勢いよく開けて、彼女は出ていった。
僕はとりあえずダンベルを床に置いて、ベッドから出る。
そして、伸びをしながら考える。
――悠はなにしに僕の部屋に来たんだろう？

「母さん、僕の分の朝飯は…？」
一階に降りてダイニングに向かうと、そこの食卓の上には、真っ白な皿とパンが、三枚しか置かれてなかった。
両親と悠の分だろう。うん、そこまではいい。
で、僕の分は？
いやいやいや、さすがに実の息子である僕の、朝飯がないなんてことはないだろう。
で、僕の分は？
「……」
母さんは何も答えない。

え…？なにこの沈黙。真面目に僕の朝飯ないの？
「……」
鋭い視線をぶつけてみるが、母さんは、やはりなんの反応も示さない。
ちょっと、いい加減にしてくれ？え？ないの？
そんな僕らの雰囲気を察してか、悠は、
「あの、はじ兄、私の半分あげるよ」
「あら、悠ちゃん。遠慮しないで。アレに優しくすると、すぐつけあがって面倒よ」
「おい！！今、本音出ただろ！！アレってなんだよ！僕息子！！」
くそ、この母親。血のつながった息子をアレ呼ばわりだなんて、あんまりだ！
「うるさいわ、横島さん」
「ここにいる人、ほとんど横島さん！！そこまでして僕を息子と認めたくないの！？」
「最近の子はヒステリックでいけない。もっと落ち着きなさい」
「誰のせいだよ！！」
「……あ、そうだ。あなた、海外に行ってくるのは、どう？今のうちに世界を見ときなさい」
「そんなに僕を家から追い出したいの！？」
「……」
「無言で目をそらすなぁぁああ！！」
この親！！児童相談所に逃げ込んでやる！児童最高ーーーー！！
しかし、朝飯について嘆いても仕方がないので、僕は母さん（？）から５００円を奪い取って、漁サンを履いて外に出る。
僕は基本的にポジティブなのだ。
「あの、馬鹿親！！僕に悠を譲ってください！！」
我が自宅に向かって大声で叫ぶ。
こうでもしないと、やっていられない！
僕は、怒りやら、悠への劣情やらを原動力に、自転車を漕ぎ出す。

ひたすら夢中に漕いだ。
――だから気付かなかった。５００円として渡されていた筈のコインが、どこの国かよく分からない通貨だったことに。
……ばかやろう！！

日曜日っ！―2―

日本円の五百円を取りに家に帰ると、リビングでは両親と悠が話していた。どうやら僕の話らしい。
「あの、、宗の事なんだけど…」
声質的に母さんかな？これは。
僕はリビングの扉に掛けていた手を外し、代わりに耳を寄せる。昔、悠の部屋を盗聴―もとい、兄として（従兄弟として？）悠の生活管理する時に用いた手段だ。
機械を買うより断然安いし、扉越しとはいえ、生で聞こえるのが強みだ。…だが、親に見つかると死にたくなるし、殺されるから最近止めた。
「宗か…。アレは、、、」
お次は父さんの声だ。
なんだ？この両親は2人とも僕をアレ呼ばわりしてるのか。
「はじ兄がどうかしたの？」
「あぁ、、悠。……変に思わないか、宗の事」
「変？」
「変、態とかさ…」
ちょっ、直球すぎるよ、父さん！！
なんで肉親にまで変態呼ばわりされないといけないんだ！！
「うん、そうだね」
って、悠！？あっさりすぎない！？
「やっぱり悠も、そう思ってるわよね！！…どうしようかしら」
「アレには彼女とか出来るだろうか…」
「はじ兄に、彼女？…できないよ！！うん」
悠がさっきから僕にキツいのは、なぜなんだろうか。実は嫌われてるんだろうか、僕。
「どうにか治らないだろうか、アレ」

僕は病気じゃないよ、父さん！！
「…無理よ。保育園の頃から変態だったもの」
保育士の胸を見ようとするのは、当たり前だろ？それを言動に表したかどうかだよね。
結局皆変態だよね。
「というか、いい加減に僕入らないと、明日から顔あわせにくくなっちゃう…」
ーこうも変態変態言われると、ね。
僕は扉から耳を離して、リビングに入る。
その時の三人の視線が、妙に身に染みたことは、言うまでもない。

「はじ兄、入るよー？」
コンコン、というノックの音と共に悠が部屋に入ってきた。
こういうのは、ちゃんと返事を待ってから、入ってくるべきだと思う。まぁ、どうでもいいことなんだけど。
「んー？どうかした？」
「いやさ、昨日、帰り一緒じゃなかったじゃない？」
ーーあぁ、そうそう。僕と悠は中学の時から、一緒に登下校してるのだ。
まぁ、仲いいし（重要）一緒の家だし（重要）学校も、学年が違うだけで同じだし（重要）
「あぁ…うん」
だが、昨日は『相談部』云々で、帰る時間帯がずれてしまったわけだ。
いや、しかしだな！！生ブルマを見るだなんてイベント、見逃せるわけないじゃないか！！
「ブル……部活だったんだ」

先程、変態変態言われていたので、ブルマとは言わないが。
すると悠は、
「はじ兄が部活…？うー」
と、唸って、その姿が可愛い！！この仕草だけで、アルバム一冊はいける！！
「はじ兄…、部活ってなに？」
「相談部って知ってる？」
悠の問いに、僕が『相談部』と言った途端、彼女は納得したように首肯した。
え、なにその反応？
「悠…？相談部って有名なの？」
恐る恐る聞いてみる。
なにせ僕は、一回も聞いたことない部活だったから、実際どんなところか知らないのだ。
よくそんなとこ入ったな、とか言わないで欲しい。
——そして彼女は、僕の問いに、
「相談部はね。別名、変態部って言われてて、変態の隔離病棟みたいなとこなんだ」
僕は初めて、ブルマを恨んだ。

部員―1―

「おぉ、きたか！！横島氏」
放課後、相談部に向かうと、椅子に座っていた部長―丘雫（おかしずく）が満面の笑みで僕を出迎えてくれた。変態病棟とか言われているのを忘れてしまうくらい美しかった。
「はい。部員ですしね」
「いや、ね。入部した人間が、そのまま入部し続ける事は珍しいんだ」
へぇ。意外だなぁ。こんなに美人の部長がいるのに。
「…皆、部員を紹介すると、次の日からこなくなるんだ。。。なぜだ」
ガックリと首を落とす部長。
多分それで来なくなった人達が、変態部とか吹聴したんだろうな。
…そうだ、ここ『変態部』なんだ。
「だがっ！！」
いきなりバッ、と部長が立ち上がる。
そして、ガシっと腕を掴まれた！うおおおおおおおおおおお！！！
「横島氏！君ならこの相談部の、立派な一員になると、私は信じてるよ！」
「はい、喜んで！！」
「おお、そうか！では、相談部の部員を紹介しよう！」
彼女は荒々しく、掴んだ僕の腕を振る。
――僕って軽々しく返事しちゃうなぁ。
でも、部長のこんなに無邪気な姿が見れたから、良かったかな。うん。

「さて、まず、君と同学年の、三富士だ」
彼女は、部室に設置されているソファの前にやってくる。
そのソファの上には、一昨日僕をここまで案内してくれたあの娘がいた。
「三富士氏じゃないんですか？」
「いや、私は女性には氏をつけないんだ」
そんなどうでもいい事を部長と話していると、ソファに寝ていた彼女は目を覚ました。
「…ーん。どうかしたんすか？」
彼女は「目」だけをこちらに向けて、口を開いた。
だるそうだなぁ。
あと、制服のまま寝ると、いい案配で制服が着崩れて、色気を感じるなぁ。
緩いシャツの襟口から見える、鎖骨。
さらに、そこに開いた襟口と素肌との洞窟。その先の見えない暗闇を、突き進んでしまいたい衝動が湧き出るが、必死に抑える。
そして、そこから目線を下にずらして、スカート。
これがまたいい味を出している。
少し捲れ上がったその布の下には、皆のオアシス、そう、アレがある。
それが見えるか見えないかのギリギリの位置をキープし、そこから目を外すのは至難の技だ。
また、スカートが捲れ上がることによって、普段より大きい面積の太ももを曝け出すことになる。
つまり、ニーハイと太腿の、黒と白のコントラストだ。
このキッチリとした境目が、さらに僕の心を掴んで離さない。
――だが、まだそれだけではない。
そう、乱れた髪と、首筋を伝う珠の汗だ。
ここまでコスチュームや身体ばかり注目したが、この二つの要素を

除いたら、それはガクンと輝きを失っただろう。
乱れた髪、そして汗。この二つが演出するもの。それは身体の火照りだ。
この火照りが加わることによって魅力が段違いに上がる。
最後に、彼女特有の気だるさも相まって、その光景は
『至福』
この二文字が一否、この二文字こそ、相応しい。
「三富士さん。グッジョブ…ッ！」
僕は今、猛烈に感動している！
「は、はぁ…？」
「ん？横島氏？大丈夫かい？」
二人揃って、奇異の目で僕を見る。
「あ…うん。大丈夫です」
僕の様子に、彼女らはさらに首をかしげたが、追及はしてこなかった。
「では、紹介しよう。彼女は三富士文（みふじふみ）。君と同じ年で、7月14日生まれ。で、百合だ」
「そっすねー」
「後は、三富士。少し喋れ」
「…うーす」
部長と三富士さんは、そんなやりとりをして、三富士さんが遂に立った。
……ばかやろう。
「えーと、三富士文。百合が好きで、経験人数は5人。まだ処女っす。よろしくっす」
三富士さんは、僕に一礼して、またそそくさとソファに寝転んだ。
ここまで流れるようにソファに寝転ぶ事ができるのは、この学校で多分、三富士さんだけだろう。
何年間この動作をしてきたのか、最早それは達人の域であった。
――さて、本題に入ろう。

「百合…だと！？そして、出会って二日目の奴に処女宣告だと！？」
重要だ。
この少女はなにを考えているんだ！
「んー？今時、同性愛者は珍しくないっすよ？」
「そういう問題じゃないよ！！というか、そこじゃないよ！」
「どこっすか？処女っすか？」
「そこだよ！！三富士さん！いきなりそんなこと言ったら、危ないでしょうが！！」
「…なにがっすか？落ち着きましょうよ？」
「落ち着けないよ！！ほかの男子に、そんなこと言ったら勘違いされるからね！？」
「勘違いっすか」
「こいつ、俺のこと誘ってんじゃねえか？的な勘違いだよ！」
「でも私、女の子にしか興味ないし…」
「それで傷つく人もいるんだよ！！これ以上ない『勘違い乙』だよ！立ち直れないよ！」
「…何情報っすかぁ」
「ソースは僕だよ！！」
小学校の頃、「優しいね」に騙されて、告白した僕だよ！馬鹿！僕の馬鹿！
「はぁ…。分かりました。そこまで言うなら、以後気を付けます…」
三富士さんは、納得いかない顔で言って、それを最後に意識をブラックアウトさせた。
うむ…。大丈夫かな…
そもそも、僕の前でこんなに無防備な姿を晒してる時点で、終わりだと思うのだが…。
ーーすると、僕の苦悩を読み取ったのか、会長が、
「大丈夫さ。もし大丈夫じゃなくとも、それは彼女の問題だ」
「でも」
僕は食い下がってしまう。

だが、会長は自らの言葉で、僕の言葉を断ち切った。
「……君は『変態』なのに、優しいんだね」

小学校を思い出して、死にたくなった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8683y/

僕(変態) と君たち(変態) の相談部

2011年12月1日23時47分発行